へんじがない、ただのしかばねのようだ。

あんこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
へんじがない、ただのしかばねのようだ。

【Ｎコード】
Ｎ６９５７Ｙ

【作者名】
あんこ

【あらすじ】
異世界で目覚めた主人公。事故にあったはずだが、なぜか自分はグールになっていた。
グールになった主人公。彼はこの異世界でどう過ごし、どう生きていくのか。

主人公はチート級になっていく予定。
魔物進化系です。

死体遺棄は犯罪です（前書き）

魔物進化系の小説が好きなので書いてみようと思いました。処女作です。
誤字、脱字。文法がおかしいところの指摘。その他感想などよろしくお願いします。

死体遺棄は犯罪です

（どこだここは…）

目を覚ますと周りには鬱蒼と生い茂る木々。空を見上げてみると赤い月、どうやら今は夜のようだ。
赤い月なんて珍しいな、夜にしては随分と明るいな、などと呑気なことを事を考えてるうちに一つの疑問が湧いてくる。

（俺、こんな所で何してんだ。）

本来ならば真っ先に疑問に思うべき事柄にようやく気付く。どうやら此処は森の中の少し開けた場所のようだ。
だが俺には森に来た覚えもないし、森に行くような予定もなかったはずだ。
なぜ自分が此処に居るのか必死に思い出そうとするが、頭に靄がかかったように、思考がなかなかまとまらない。
数分、或いは数十分経っただろうか。随分と長い間頭を抱えていた気がするが、ようやくと思い出した。

（そうだ、俺…）

そうだ、俺は車に轢かれたのだ。
夕食のあと、小腹が空いたので近くのコンビニに。その帰りに信号無視、加えて無灯火で走ってくる車に撥ねられたのだ。
しっかりと左右確認をしていれば避けられた事故かもしれないと、今更ながら後悔する。だが車に轢かれた自分がなぜこんな森の中に。
もう一度周りを確認してみるが、どう見ても森の中だ。当然道路なんてどこにもない。

考えられる可能性は一つ。そう、死体遺棄だ。
信号無視に無灯火運転で人ひとり撥ねてしまったのだ。厳罰は免れないはずだ。焦った運転手は、俺が生きてるのを知ってか知らずか、事故をなかったことにしようとしたわけだ。
だが残念。俺は今もこうして生きている。運転手の目論見は見事に失敗したわけだ。ナンバーを確認できなかったのは残念だが、今は街中の至る所に、それこそ普通の民家にまで監視カメラが設置されている時代だ。そう簡単に警察から逃げ切れるものではない。
心のなかでほくそ笑みながら、とりあえず運転手の事は頭の隅に追いやる。
さて、今一番に考えたくてはならないのは、ここが何処かだ。
周りの状況から察するに、ここが森の中なのは明白。死体遺棄の定番のような所だ。
俺は決して体重が軽いわけではない。同年代と比べても普通と言える基準には達している。それに俺を轢いたのは車だ。俺を此処まで、とは言わないが、近くまで運ぶのには十中八九車を使ったと見て間違いないだろう。
車が走れるということは道路がある。道路が通っていれば、それを辿って人に出会うことは難しくない、はず。唯一の心配は此処が日本の何処かだ。
あまりにも山奥だと、人に出会う前に力尽きて、そのままお陀仏。なんて事も十分にあり得る。

（まあ心配してどうにかなる訳じゃないか。）

懸念を消し去ることはできないが、今は考えてもどうにかなるわけじゃない。いつまでも怯えて何もせずに体力を消耗するのは愚の骨頂。
そう思考を切り替えて、俺はさっそく行動を起こすことにする。幸いにも月が明るいお陰か視界は良好。いつもよりも良い気さえして

くる。

（不幸中の幸いだな。）

自嘲気味な笑みを浮かべながら、怪我の有無を確認する。
今まで体の何処にも痛みを感じなかったので失念したいたが、仮にも車に撥ねられたのだ。骨折や大怪我をしていてもおかしくない。

（首…は大丈夫そうだな。腕も問題なし。足…も大丈夫そうか…）

そうして身体の隅々まで確認して、最後に足を確認しようと靴を脱いだところで思わず目を見張る。
左足の親指がないのだ。文字通りなくなっている。目覚めてから一番大きい焦燥感が俺を襲う。

（ゆ、指がない！？）

思わず周囲に目を走らせるが、自分の指らしきモノは見当たらない。

（事故の時か！？もしかして壊死！？）

焦りながらも左足、もう親指とも呼べなくなってしまった患部を見る。
断面には白い、骨の様なものがものが見える。痛みを感じないのは壊死してるからだろうか。医学的な知識には乏しいが、とにかく早く治療しなければならないと言うことは分かる。
急いで靴を履いて起き上がる。が、妙に体が重い。体を見下ろすが、外見的な異常はさっきの親指だけだ。
もしかしたら轢かれた時に内臓にダメージを負ったのかもしれない。
これはとうとうヤバくなってきた。

焦りながらも致命的な失敗をしないようにしっかりと思考する。
ここは森の中だ。闇雲に路を探して彷徨えば、さらに森の奥深くに進んでしまう危険がある。
幸い今いるのは森の中でも開けた場所だ、ここを中心に辺りを探索してみよう。

路は思いのほかすぐに見つかった。
探索を始めて十数分。近くに小道があるのを発見した。車が通れるほどの道幅はないが、人ひとり通るのには十分すぎる大きさだ。
少しの安堵を感じながら道を進み始める。どちらに進むべきか迷うと思ったが、反対側は進めば進むほどに草木が茂ってるようだったので、こちら側に進むことに決めた。両方向に綺麗な道が続いていなかったのは有難かった。
またもや不幸中の幸いだ。もしかしたら神様は俺に生きろと言っているのかもしれない。
心の中で神に感謝しながら路を進む。

どれくらいの間歩いただろうか。既に東の空が白んで来ている。
心なしか時間が経つに連れて体が重くなってきているようだ。

あれから数時間。太陽はもう完全に顔を出して、今は強烈な朝日で俺を照らしている。
歩いても歩いても、向かう先は路、路、路。だが、少しずつ道幅が広がってきている。今では車一台なら余裕で通れるだ。
なんの変化もない路が続いていたら、俺の心はとっくに折れていたことだろう。
疲れは感じないのに体が重い。怪我のせいで感覚がおかしくなって

いるのかもしれない。

さらに数時間。太陽の位置から考えて、今はもう昼頃だろう。
体が重いせいで歩行速度は普段より数倍劣るが、それでも既に数キロは歩いたはずだ。
そろそろ何か変化がないと、いい加減心が折れそうだ。そんな事を考えていると、木々が途絶えている場所が見えてきた。とうとう森の出口に辿り着いたのだ。
出口の向こうには、さらに大きな路が見える。車三台は通れる幅がある大きな路だ。コンクリートで舗装されてはいないが、砂利が敷き詰められて、きちんと人の手で整備されてる事が窺える。
久々に人の匂いを感じさせる人工物に、体のダルさなど気にならなくなり、足取りも軽くなる。
路に気を取られていたせいで気付かなかったが、出口の脇。木の陰で眠っている人影を発見した。二十代前半の青年で、実に気持ちよさそうに眠っている。人を見つけられた安堵と、そのほのぼのとした光景に思わず笑みが溢れる。

（路を…いや、まずは病院の場所を聞いてみよう。車があるなら乗せてもらえるように頼むか。）

などと考えながら、青年に近づいて声を掛ける。

「おぉおお」

自分の声に自分で驚く。確かに「すみません」と言ったはずなのに、出てきた言葉は「おぉおお」だ。
おかしい。もう一度「すみません」っと言ってみる。

「おぉおお」

駄目だ。なぜか口から出る言葉は「おぉおお」だ。

（もしかして事故のせいか！？頭を打ったのかもしれない。大変だ！早く病院に行かないと！）

そんな事を考えていると、寝ていた青年が目を覚まして、まだ眠たげな目でこちらを見る。

「なんだ…？う、うわっ、なんでこんな所に魔物がいるんだ！？」

俺を見てそう叫ぶ。一応周りを確認してみるが、自分と青年以外に人影はおろか動物さえ見当たらない。

（ま、魔物って…）

確かに俺はお世辞にもイケメンと言える顔ではないが、魔物と言われたのは人生で初めてだ。

（あ、あれ…？な、泣くな俺…泣くんじゃない…）

目尻に涙が溜まる。自分の心がここまで繊細だとは思わなかった。人に悪口を言われて泣きそうになった事など、今までに一度たりともない。面と向かって悪口を言われた事が、人生で数えるほどしかないのも起因してるとは思うが、さすがに魔物はないと思う。魔物は。

そんな俺の心境も知らずに、青年は好き勝手に叫び続ける。

「しかもグールじゃねーか！？何で真昼間からこんな所にいるんだ

よ！」

（グール…）

俺の涙腺はもう決潰寸前だ。気持よく寝てるところに突然声を掛けたのは、確かに悪かったと思う。

だがそれだけで魔物呼ばわり、挙句の果てにグールときた。あまりにも非道い暴言に、今度は青年に対してふつふつと怒りが湧いてきた。

（俺と歳もそう変わらないくせに好き勝手言いやがって！）

前半部分は完全に言い掛かりだが、頭に血の上った俺はそんな事には気づかない。

怒りを孕んだまま、大きな声で怒鳴りかかる。

「おぉぉおおおおおおお！」

だが出る声はやはり「おぉおお」である。自分の声を聞いて冷静になるとはおかしな話だが、急激に自分が冷めていくのを感じる。

冷静に考えれば、こんな所で怒鳴り合ってる場合ではない。早く病院の場所を聞き出さなければ。車はこの様子では期待できないか。

だが、「おぉおお」でどうやってコミニュケーションを図ろうか。

そんな事を考えていると再び青年の怒鳴り声が耳をつらぬく。どうやらさっきの俺の怒鳴り声でさらにヒートアップしてしまったようだ。

「や、やろうってのか！グールの分際で！」

そう言うと青年は、脇に置いてあった荷物の一つを手に取った。

青年が手に取ったものは剣だった。鞘から抜き出したそれは間違い

なく剣である。最初は農具の類かとも思ったが、どうみても剣にしか見えない。
たとえ剣でなかったとしても、人を殺傷するのには十分過ぎるほどの刃渡りを持つ刃物である。
俺の全身に緊張が走る。刃物を向けられた経験など当然ない。ナイフはおろか、包丁を向けられた事さえ一度もないのだ。
青年が剣を構える。俺が止めようと声を掛けるよりも前に、青年がこちらに駆け出す。
俺はどうしようかと必死に考える。その間にも青年は走ってどんどん距離を縮めてくる。
俺と青年の距離はもうあと数歩ほどになってしまっている。
俺はどうすることも出来ずに、左手を前に突き出し、右手で頭を守る体勢をとって目をつむる。
青年が剣が振り下ろしたのだろう。俺の耳に剣で風を斬る音が届く。
数秒経って恐る恐る目を開けてみると、青年は俺から数十歩離れた所で剣を構えていた。
風を斬る音は目の前で聞こえたので、剣を振り下ろした後で距離を取ったのだろう。

（斬られなくて良かった…）

そう安堵して右手を見てみると、手首から先がなくなっていた。

しかし、しかばねはうごきだした。

どのくらい走っただろうか。
俺は青年から逃げるために、脇目もふらずに森の中に逃げ込んだのだ。
体が重いので、ほとんど引きずるような無様な走り方だった。スピードも普通に歩くよりも少し速いくらいだ。
だが休むことなく此処まで逃げてきた。あの場所から一度も休まずにだ。いや、休むことが出来なかったと言ったほうが正確だろう。
時間にして三四時間だろうか。もしかしたらもっと長いかもしれないし、もっと短いかもしれない。
身を隠せそうな大きな樹洞を見付けたのだ時は、安堵で倒れ込みそうになってしまった。
逃げる途中で様々な生き物を見た。それこそ魔物と形容するに相応しい生き物たちだ。
身の丈が子供ほどしかない、醜い小人。
大人でも丸呑みにされてしまいそうな大きな犬。
棍棒を担いだ一つ目の巨人。
今まで一度も見たことのない化物達だ。青年に剣で斬られた時以上の恐怖で心が塗りつぶされる。

（だけど一番恐ろしいのは…）

改めて自分の左腕を確認するが、斬られた手首が元通りになっているはずもなく、そこには痛みを感じることもなく、血を流すこともない腕が変わらずあった。

（どうなってるんだよ…）

青年の言動が頭の中でよみがえる。
必死に否定しようとしても、数々の証拠が逃避を許さない。
俺はどうやら化物になってしまったらしい。

せめてグール並に

あの青年は俺を見て「グール」と言っていた。
グール。確か昔やったテレビゲームにそんな名前の敵モンスターが出てきた。
記憶が正しければ、人の死体を貪る動く死体だ。そこまで思い出して、俺はため息をついた。

（はぁ…）

つまり一度は死んで、第二の人生、というより人生の延長戦をスタートしたわけだ。
食事云々の部分は気になるが、所詮ゲームで得た知識だし、現状腹は減ってない。ましてや人の死体を食べたいなんて微塵も思ってない。
しかしどうにも素直に喜ぶことができない。
延長戦とは言っても動く死体だ。
しかも周りの状況。少し足を延ばせば見たこともない化物が闊歩している。どう見ても日本じゃない。というより地球じゃない。
意味が分からない。何で俺はこんな世界に一人で彷徨ってるんだ。
セオリー通りなら俺は世界を救うために異世界に召喚された勇者のはずだが、なぜかグールだし。なぜか目覚めたのは何も無い森の中だし。

（考えても仕方ないか…）

答えの出ない自問に続けても意味がないと、俺は別のことを考える。
不幸中の幸いと言っていいのか、元の世界で俺の身を案じてくれる身内はそう多くない。

仲の良い友達数人程度だ。
両親は既に他界しているし、俺の死、ではなく行方不明を心配してくれるようなできた親戚もいない。
元の世界でやりたい事があったわけではないが、人並みに幸せな人生を送って、人並みに幸せな最期を迎えると勝手に思い込んでいた。

（ああ…もう人並みも叶わないんだな…）

そこでようやく実感する。グールになってしまった自分は、人並みの人生を願うことも許されないんだと。
青年の反応を見る限り、人と仲良く暮らしていくなんてことも難しいだろう。
そう思うと目頭が熱くなって、自然と涙が頬を伝った。

あれからどれくらい時間が経っただろうか。
もう外はすっかり暗くなって、夜の森を月が煌々と照らしている。
今日の月は元の世界と同じように白く光っている。

（これだけ見ると元の世界と変わらないんだけどな…）

俺はよしっと思考を切り替える。今ので嘆くのは最後だ。
もう十二分に嘆いて逃避した。
今の自分にはどうせ、どうすることも出来ないのだから、もう開き直ってしまおう。
人並みの幸せが望めないなら、グール並みの幸せを掴めばいいじゃないか。
折角の延長戦だ。
今度は蘇っても悔いがないように生きようじゃないか。

せめてグール並に（後書き）

なぜあんな所に倒れていたのか。
なぜグールになっていたのか。
なぜこの世界に来てしまったのか。
とかはちゃんと理由があります。
今後書いていく予定なのでお楽しみに。

なにをすればいいのかわからない。

人生の延長戦を謳歌することに決めた俺だが、如何せんこの世界のことが何も分からない。
分かっているのは魔物と人間がいること。あとは人間が剣を精製出来るくらいの文明水準には達している、そのくらいだ。
よくあるＲＰＧゲームでは、魔物が一斉に襲いかかってくるが、魔物共通の言語みたいなものが存在するんだろうか？
いやいや、ゲームと異世界に同じ法則を当てはめようとするのは大変危険だ。
「やあ」と気軽に話しかけて半殺しにされるなんて真っ平御免だ。

（だけど、それじゃあどうするか…）

頭を抱えても一向に良いアイディアは浮かんでこない。
同族（グール）を探すにしても、この世界に来てから、同族の影さえ見えない。
闇雲に探しまわるしかないので、コレは最後の手段だ。
そんな訳でとりあえず他の魔物に話し掛けてみるしかなさそうだ。
グールと言っても仮にも魔物。生身の時よりは防御力は上がっているはずだ。
そうやって自分を安心させて、さらに思考を継続する。

（話し掛けるのは…やっぱりアイツだよな。）

俺がアイツと言っているのは、この樹洞を発見するまでに見かけた数々の魔物の一種。
緑の小人のことだ。
見かけた中で一番小さいし、なにより弱そうだ。
そうと決まれば早速行動開始だ。

樹洞の中で休んだお陰か昼間よりも体が軽い。さらにグールの体は暗視が効くようだ。
一日歩き詰めだったにも関わらず、空腹も眠気も感じなし、考え様によっては良い体を手に入れたかもしれない。
まあ元の体に戻りたいかと聞かれたら、ハイと即答しますけどね。

木々の間に身を隠しながら、慎重に進んでる内に魔物を見掛けない事に気が付く。
グールの体になって失念していたが、魔物も生物なら夜は寝るだろう。
夜行性の魔物も今のところ見掛けない。
コレは好都合だ。魔物がいなければ身を隠す必要がないので、楽に進める。
道端で寝ている魔物がいないことから考えても、普通の魔物は巣を作るようだ。
巣の位置を把握しておいて損はないだろう。
俺はそう結論付けてさらに森の中を進んでいく。

見付けた。あの緑のヤツの巣だ。一番初めに見つけたのがヤツらの巣だったのは運がいい。
洞窟の入口近くに見張りをするようにように一匹の緑が立っていたから、見付けるのはそう難しくなかった。
さてどうするか。巣穴は発見したから、朝になるまで待って、散り散りになった所で話し掛けるのが一番いいが、何しろグールの体は眠ることができない。
夜が明けるまでにはまだ数時間あるだろう。朝まで待つのは精神的

に厳しい。
それに散り散りになる前に発見されて囲まれたら最悪だ。他のヤツらが寝ている隙に接触したほうが良いかもしれない。
そういう訳で俺はさっそく見張りの緑に接触してみることにした。

刺激しないようにゆっくりと近づく。
緑との距離が十数歩ほどになってようやく相手もこちらの存在に気付いた。
そこで俺は声を掛けてみることにする。

「おぉおおお」

相変わらず、口から出るのは「おぉおお」だが、もし相手に意味が伝わっているなら、何かしらの反応が返ってくるはずだ。
ちなみに俺が言った内容は「こんばんは」だ。

（お。向かってきた。）

俺の声に反応してか、緑が近づいてきた。
片手を挙げて、今にも「やあ」と返事を返してきそうだ。
さらに数歩。緑はとうとう俺の目の前までやってきた。
俺がすっかり言葉が通じたと思って、次に何と話しかけようかと迷っていると、緑が挙げていた片手を勢い良く振り下ろして、俺の頭を殴りつけてきた。
殴られた衝撃で一瞬視界が暗転する。
その間にも緑は俺を殴り続けている。
どうやら言葉は通じてなかったようだ、と痛覚の無い体で冷静に考える。
とりあえず殴るのを止めさせなければ。いくら痛覚がないとはいえ、

この体では傷の回復は見込めない。
そう思い、一番手っ取り早い方法で殴るのを止めさせることにする。
つまり殴り返すのだ。殺すつもりはないが、対象が殴り返してくると分かれば、相手も少しは慎重になるだろう。
距離をとってくれれば万々歳。その間に逃げるなりなんなりすればいい。

俺は少しの力で緑を殴り返してみる。緑は殴るのを止めない。
俺は力を強めて緑を殴り返してみる。緑は殴るのを止めない。
俺は渾身の力を振り絞って緑を殴り返してみる。

「ギャァアーーー！」

緑が鶏の首を締めて振り回したかのような奇声を発して地面に倒れ込んだ。
俺は恐る恐る倒れた緑を覗き込んでみる。
すると何の前触れもなく、頭の中に「ゴブリン」という単語が思い浮かぶ。
なぜいきなりそんな単語が思い浮かんだのか分からないが、もしかするとこの緑はゴブリンと言う魔物なのかもしれない。
そんな事を呑気に考えていると、巣穴の方からゴブリンの奇声が聞こえてきた。

「ギャァアーーー！」

さっきの奇声を聞いて、巣穴の奥にいたゴブリン達が目覚めたようだ。
これはまずいと俺は逃走を謀る。
だが悲しきかなグール。先に走りだしたにも関わらず、巣穴から這い出してきたゴブリン達にいとも簡単に追いつかれ、今は殴られな

がらも必死に逃亡中だ。
だいたい俺が全力で走ってゴブリンたちの歩く速度よりも少し速いくらいだ。
巣穴から出てきたゴブリンは計四匹。どれも見張りをしていたゴブリンよりもひと回り小さい。
足を止めて応戦しようかとも考えたが、後続のゴブリンいないとも限らない。
幸いコイツらは小さいので、殴られてもダメージはほぼゼロだ。たぶん。痛覚がないので、実はよくわからないが。
ただ、見る限りでは殴るというより、むしろ叩くだ。この程度の攻撃なら身体がどうこうなることはないだろう。
それよりも早く巣穴から離れなければ。大きな個体が追いかけて来ないとも限らないしな。

しばらく走ると木々が急に途絶えて草原に出た。いや、草原と言うよりむしろ湿原か。
所々に水溜まりのような沼があり、足元が見えないくらい背の低い草が所狭しと生えている。
ゴブリン達は俺が森を出ると、追跡を諦めて帰っていった。いやにあっさりしているが、俺としては有難い。
異種族に言葉が通じないことも分かったし、次は同族探しだ。
せっかく新しい場所に出たんだ、森に戻っても何かあるわけじゃないし、当面はこの湿原を進むことにしよう。
俺は今後の方針をそう定めて湿原を歩き出す。
数日前の俺ならここで座り込んでいるだろう。こういう時に疲れない体は本当に便利だ。

ルガリア大湿原

あれから数時間、太陽は既に俺の真上だ。
天気は雲ひとつない晴れ模様。周りの野草の様子から、側面から風が吹いているのが分かる。
感じることが出来ればさぞ心地よい風だろう。
何も感じることのない体を恨めしく思いながら、頭の中で現在判明している情報を整理する。
森を出てから此処までに、大きく分けて三つの事実が判明した。

まず一つ目。
この体は太陽の光に弱いということだ。
太陽が昇るに連れてどんどん体が重くなり、太陽が登り切った今の気分を一言で表すなら「最悪」の漢字二文字だ。
昨日は路を辿ることに必死だったのであまり気にならなかったが、色々な事に気を配るだけの余裕が今の俺にはある。
まるで体に金属の重りを付けたようだ。太陽をここまで憎く感じる日が来るなんて、数日前の俺は想像もしなかっただろう。

そして二つ目。
この体どうやら魔物に襲われないらしい。魔物達はその嗅覚か、或いは野生の感で俺の死臭を嗅ぎ分けてるのかもしれない。
俺も最初のうちは魔物を見かける度に死んだフリをしていたが、どうやら相手も俺に気付いていながら襲ってこないふしがある。
遠くに犬のような魔物を発見して観察していた時など、観察に夢中になって、背後から同種の魔物の接近を許し、気付いた時に驚いて思わず声を上げてしまったが、魔物はこちらを一瞥しただけで、何

事もなかったように通り過ぎていった。
この出来事でこの事実を確信した俺は、魔物もっと近くで観察してみることにした。
近くで見ると、犬型の魔物の毛は普通の犬とは違い、針の集まりである事が分かった。眼も真っ赤に充血したようで、その凶暴性を顕著に表していた。
さらに調子に乗って、腕を延ばせば触れることが出来る距離まで近づいたが襲われることはなかった。
そしてとうとう調子に乗った俺は魔物に触ってみた。

結果はこの通り。体当たりをかまされて、左腕の骨が折れました。
痛覚がないので体当たりは痛くなかったが、吹き飛ばされた後に左手を確認した時、腕が曲がるはずのない方向に曲がってるのを見て、思わず泣きそうになってしまった。俺の体がどんどんボロボロになっていく…主に左側を中心に。
ハイ、反省します。猛省です。戒めとして左腕はそのままにしています。
本当は元に戻そうとして取り返しのつかないことになることが怖かっただけですが。

三つ目は此処がルガリア大湿原という名の湿原だということ。
これは湿原を進んでいる途中、人の死体を発見した時に判明した事実だ。
死体はあちこち食い荒らされていて、見るも無残な状態となっていたが、目的の物は無事だった。
荷物は魔物に荒らされた形跡が見られたが、概ね良好。きっと食料だけ持ち去ったのだろう。
中身を漁って使えそうなものを選別する。
役立ちそうな物は短剣、地図、マント、コンパスくらいだったが、

今の俺にこれだけでも有難い。特にコンパスと地図はこれかの旅に必須と言ってもいいくらいだ。
地図を確認してみたところ、全く知らない言語で地名などが書かれていが、なぜか俺はその全く知らない言語を理解することができた。思い返せば異世界で、見知らぬ青年が日本語を喋るのもおかしな話だ。
もしかしたらあの青年も、異なる言語を使用していたのかもしれない。
この世界に来てから不可解な事ばかりだが、いい加減に不可解な事にも馴れた。考えても仕方ないことは仕方ないのだ。
俺はこの世界に来て、思考の切り替えが早くなったことを自覚しながら地図に目を落とす。
地図によると此処は「ルガリア大湿原」と言うようだ。
さらには湿原の丁度中央に「ルガリアダンジョン」というダンジョンも存在するらしい。
この辺りにも同族のグールはいないようだし、ダンジョンに行ってみるのも悪くない選択だ。
湿原の西側にある「サンハイルの古城」というのも気になるが、距離から考えて、先にダンジョンに向かうのが妥当だろう。
ちなみに俺が目覚めた森は「シクラセ森」という名前のだった。

そんなこんなで俺はダンジョンに行くことに決めた。
そんなに大きな湿原でもないようだし、地図もある。
今日中にはダンジョンに付けるだろう。
俺はダンジョンという響きに胸の高鳴りを抑えられないまま、決して胸が高鳴ることのない体で湿原の中央に向けて進路をとる。
目指すは「ルガリアダンジョン」。人生で初めてのダンジョン体験だ。

ようそこ、ここはルガリアダンジョンです。

地平線に日が沈む頃。俺はとうとうルガリアダンジョンに到着した。
地図を見付けた地点から、ひたすら真っ直ぐ歩いてきたが、どうやら無事に到着出来たようだ。
地図はによるとこの湿原はほとんど円形で、真っ直ぐ歩けば何処からでもダンジョンに到達できるのが有難かった。
ルガリアダンジョンの入り口は、周りの湿原より少し小高くなった丘の上にあり、大きな平たい岩が二枚組み合わさって出来ていた。
遠目からでよく分からないが、どうやらこの岩の隙間から地下にダンジョンが続いるようだ。
自分の想像していたダンジョンとは似ても似つかないその外観に、少し拍子抜けしてしまう。
これではただの洞窟だ。
俺が想像していたのは、古代遺跡のような荘厳な建築物だった。

（まあそんな仰々しいものがこんな辺鄙な所に建っているはずもないしな。）

少し気持ちが落ち込んだが、気にせずに進み続ける。
ダンジョンに近づくに連れて、小さな看板が立っているのが見えてきた。
地面に挿した角材に、文字が書かれた板が打ち付けられているだけのみすぼらしい看板だ。
板には「ルガリアダンジョン」とだけ書いてある。
もう少し何か書いてあってもいいだろうとも思ったが、よく考えればこんな湿原の真ん中にダンジョン以外の目的で訪れる人間もいないだろう。

（此処がルガリアダンジョンだと確認も出来たし、それで良しとするか。）

そこでふと今まで自分が歩いてきた方向に目を向ける。
そこには夕日に照らしだされた視界一杯の湿原が広がっていた。
夕焼けをバックに世界は紅に染まり、所々に点在している沼が太陽の光を受けてキラキラと輝いている。周りよりも少し高い、この丘の上だからこそ見える景色だ。
絶景と言っても過言ではないであろうその光景に、俺は思わず息を呑む。
この景色を見られただけでも此処まで来た価値がある。これで同族を見つけられれば百二十点満点だ。
俺はうきうきとした気持ちのまま、意気揚々とダンジョンの中に足を踏み入れる。

ダンジョンの中にコレといって変わったものはなく、「ただの洞窟」という感想もあながち間違っていたわけではないようだ。
思っていたよりも広々とした洞窟が先に続いているが、予想と違うのはそのくらいだ。
進むに連れて狭くなるといったこともないようだし、のんびり歩き進める事にする。
日の光はどんどん弱くなっていくが、グールの体である俺にそんな事は関係ない。むしろ体が軽くなる。

しばらく進み続けると前方に人影を発見した。
人影は一人。こちらに背を向けて突っ立っている。
ようやく同族を見付けたと、さっそく声を掛けようとしてあることに気付く。

そう、ここはダンジョンなのだ。ダンジョンと言えば、お宝、トラップ、魔物、そして冒険者。
ここまでの道のりで、生きている人間を一人も見かけなかったので失念していた。
ダンジョンなんだから冒険者の一人二人いてもおかしくないのだ。

（どうするか…）

いきなり声を掛けるのは危険過ぎる。
このノロマな体では奮戦は望めないし、いくら防御力が上がっていたとしても、剣の前には歯が立たないのは身を以て経験した。
しかし気になることが一点。相手はこの暗闇で何をしているかということだ。
人の目ではこの暗闇の中で物を視るなんてことは不可能だ。
この事を考慮すれば相手が人ではないのは明白なのだが、相手が異種族だった場合も考慮しなければならない。
ゴブリン程度ならよいが、強い魔物が威嚇と勘違いして襲ってきたら一溜まりもない。

（人形だからグールだとは思うが…しばらく様子を見てみるか。）

現状自分がとれる最善の策は観察だと断定する。
そうと決まればさっそく行動開始だ。俺は近くの岩陰に身を隠す。
相手は俺に気付くことなく、未だに突っ立ったままだ。

観察を始めてから大体十分ほどだろうか。
時々大きく体が揺れるのは確認できたが、その他には全く動きを見せない。
一体何をしているんだ。

観察を始めてから、俺の体内時計ではもうすぐ四十分だ。
退屈な時間は長く感じるというが、時間感覚には自信がある。誤差はプラスマイナス五から十分で収まっているはずだ。
しかし俺は生来気が長い性質ではない。
さすがに時々振るえるだけの物体を四十分間見続けるのには無理がある。
とうとう我慢できなくなり、俺は対象に声を掛けることにする。
様子を見る限り凶暴な魔物ではないだろう。
なによりもう我慢するのは限界だ。

「おぉおお」

対象の体が大きく揺れて、ゆっくりとこちらを振り向く。

「おぉおお」

その声を聞いて俺は安堵のため息を漏らす。
どうやら相手もグールだったようだ。
しかし良い事ばかりではない。
俺の期待はあっさりと裏切られ、今度は落胆のため息が口から漏れ出す。
そう、俺は相手の言葉を理解できなかったのだ。
もう一度話し掛けても結果は同じ。返事は返ってくるし、襲われることもないが、相手が何を伝えたいのかまるで分からない。

（駄目だったか…）

意思の疎通が出来ない原因として考えられる可能性は二つ。

一つはこの魔物がグールではないというもの。
二つ目はグールは同種族とコミニュケーションが出来ないというもの。
できるだけ前者であることを願いつつ、声を掛けた魔物に近づいていく観察してみることにする。

その魔物はどこからどう見てもグールだった。
後ろ姿では分からなかったが土気色の肌に、所々肉が腐り落ちて白い骨が覗いている身体。
そう、どこからどう見てもグールなのだ。これをグールと言わずして何をグールと言うのか。
まさにグールを体現したかのような魔物だ。

（いや、しかし…）

そう、しかしだ。
人は外見ではなく内面であると言うし。そもそもここは異世界だ。
俺に分からない事も多いだろう。
そうだ、この魔物がグールではない可能性も十分にあり得る。
などと自分に言い訳をしつつ、その場を急いで後にする。
後にはグールがぽつんと一人残されていた。

随分奥深くまで進んできたと思う。
一般的なダンジョンの大きさは知らないが、そろそろ最深部が見えてきてもいい頃ではないだろうか。
あれから何度もグールらしき魔物に遭遇した。
身体が半分以上腐り落ちているヤツ、目玉が片方ないヤツ、その他

色々だ。
最初のうちは会う度に話し掛けていたが、返ってくる呻き声はどれも同じで理解することができない。
俺は途中から自然と話し掛けるのを止めていた。

（もしかしてこの世界では、俺は誰にも言葉を伝えることが出来ないんじゃないか？）

ふと不吉な想像が頭をよぎる。

（いかんいかん！ネガティブになってどうする！）

頭を振るって不吉な想像を追い出す。
延長戦を楽しむと決めたのだ、言葉が伝わらないくらいどうした。
人生の楽しみ方なんて千差万別だ。今日見たような絶景を探しまわる、そんな人生だって悪くないじゃないか。
前向きに物事を考えよう。
オマケの人生であれこれ悩んでも仕方ない。

そうこう考えているうちに洞窟の最深部が見えてきた。
最深部は今までの道のりからは考えられないくらい広く、天井までの高さは目測で２０ｍ近くある。
入り口付近から見渡した限りでは、ダンジョン定番の宝物はなさそうだ。
ただ宝の代わりと言わんばかりに白骨死体が数体転がっている。
冒険者のものだろうか。そばにはボロボロになった剣が無造作に転がっている。

（これでドラゴンでも居たら雰囲気でるんだけどな…）

中央まで進んでもう一度周りを確認する。
しかし目に映るのは岩の壁と白骨死体ばかり。
またもや落胆のため息が漏れそうになるが、そこであるものを発見する。
入り口のすぐ横の岩の裂け目。その中に裸の腐乱死体と、その死体の持ち物であると思われる大きな鞄があるのを発見したのだ。
白骨死体ばかりだと思ったが、比較的新しい死体もあるようだ。
俺はすぐに近づいて、鞄の中身を物色し始める。

（こ、これは…）

荷物の一番上には綺麗に畳まれた服があった。
もう一度死体を確認する。死体は依然裸のままだ。
手元を確認する。そこには綺麗に畳まれた衣服。
どうやらこの人は生前そういう趣味があったようだ。

（いくらなんでもダンジョンの中でしなくても…）

深く考えるのは止めよう。戻ってこれなくなる。

荷物を検分した結果、この死体は生前「ロナルド・ウィークリー」という名前だったらしいことが分かった。
それよりも重要なのは名前が書いてあった日誌だ。
日誌の表紙には手書きでこうつづられていた。

「グール生態研究日誌」

と。

ようそこ、ここはルガリアダンジョンです。（後書き）

次回、知られざるグールの生態が明らかに！

各話の字数にむらが有り過ぎる…

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6957y/

へんじがない、ただのしかばねのようだ。

2011年11月22日01時12分発行